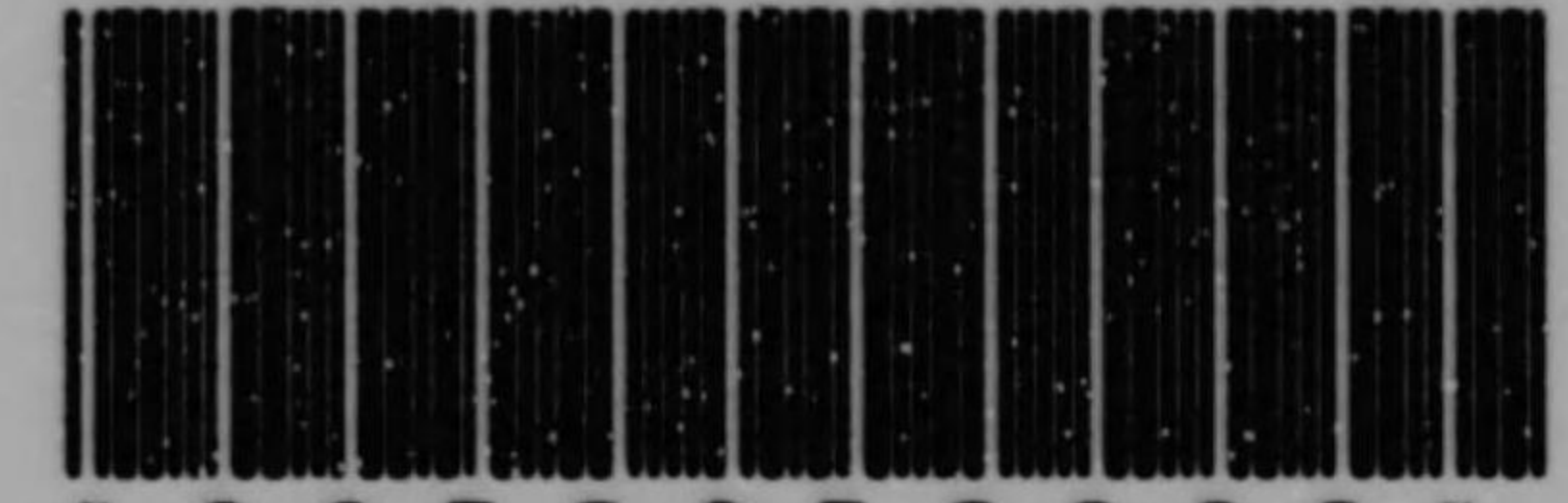


1



0053953000

0053953-000

384.5-Mo55ウ

阿波の童戯と童謡

森本安市・著

日本文芸社

昭和17

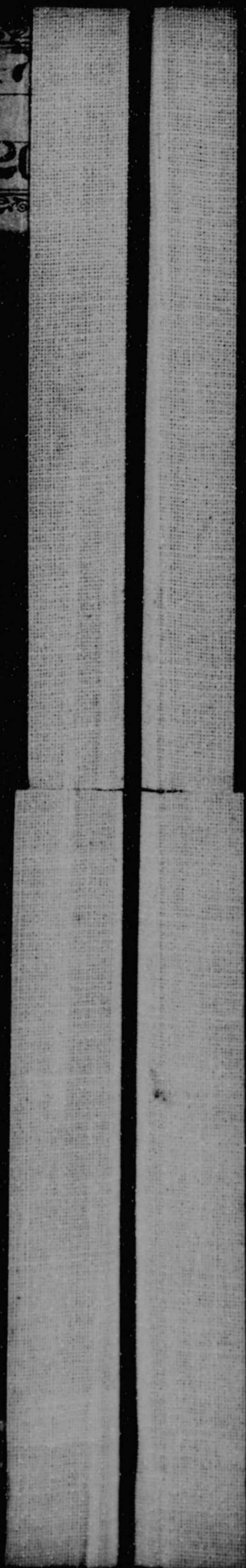
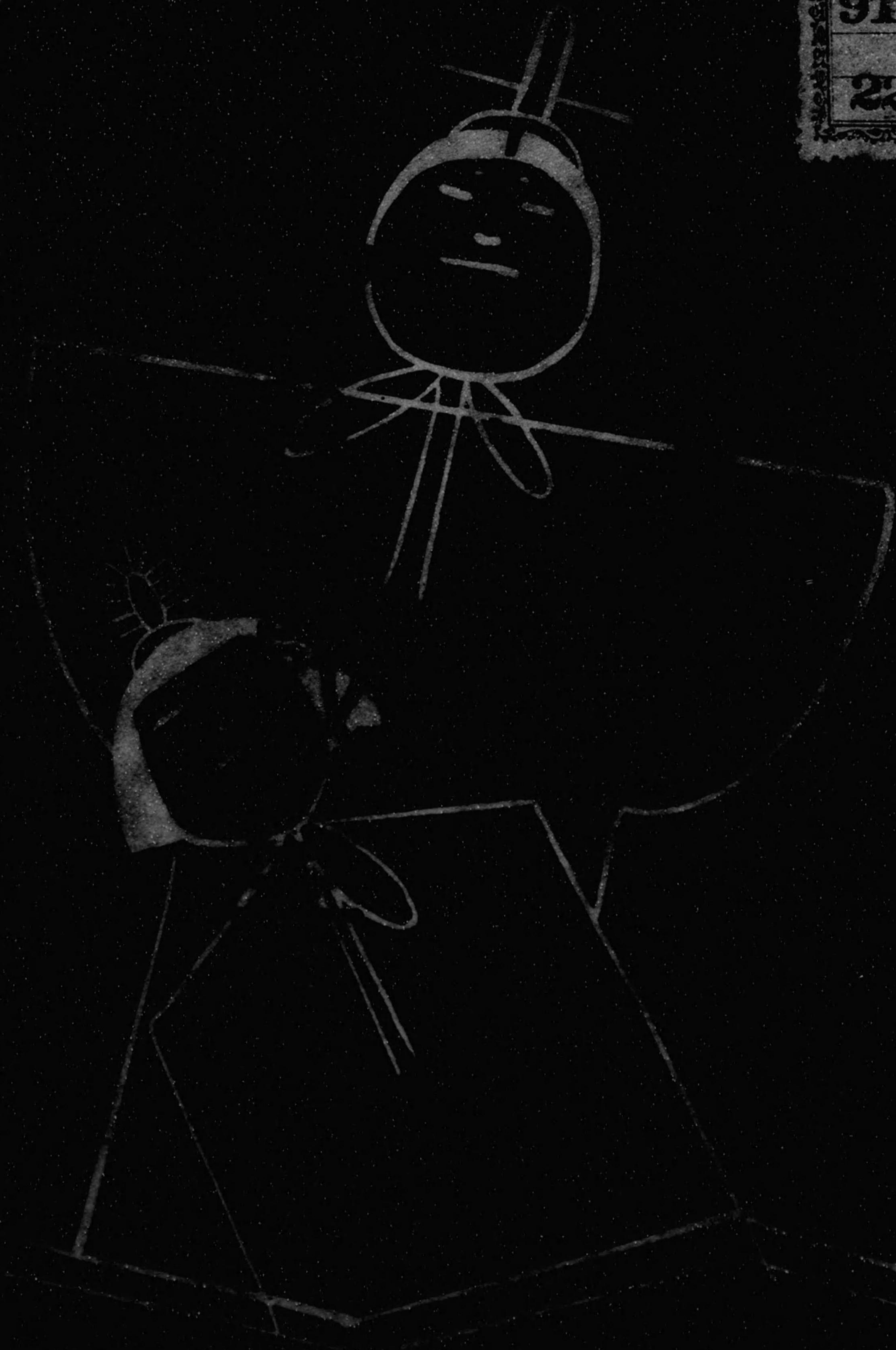
AIB

384.5
Mo55

阿波民俗叢話
第一輯
阿波の童戯と童謡
森本安市著

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

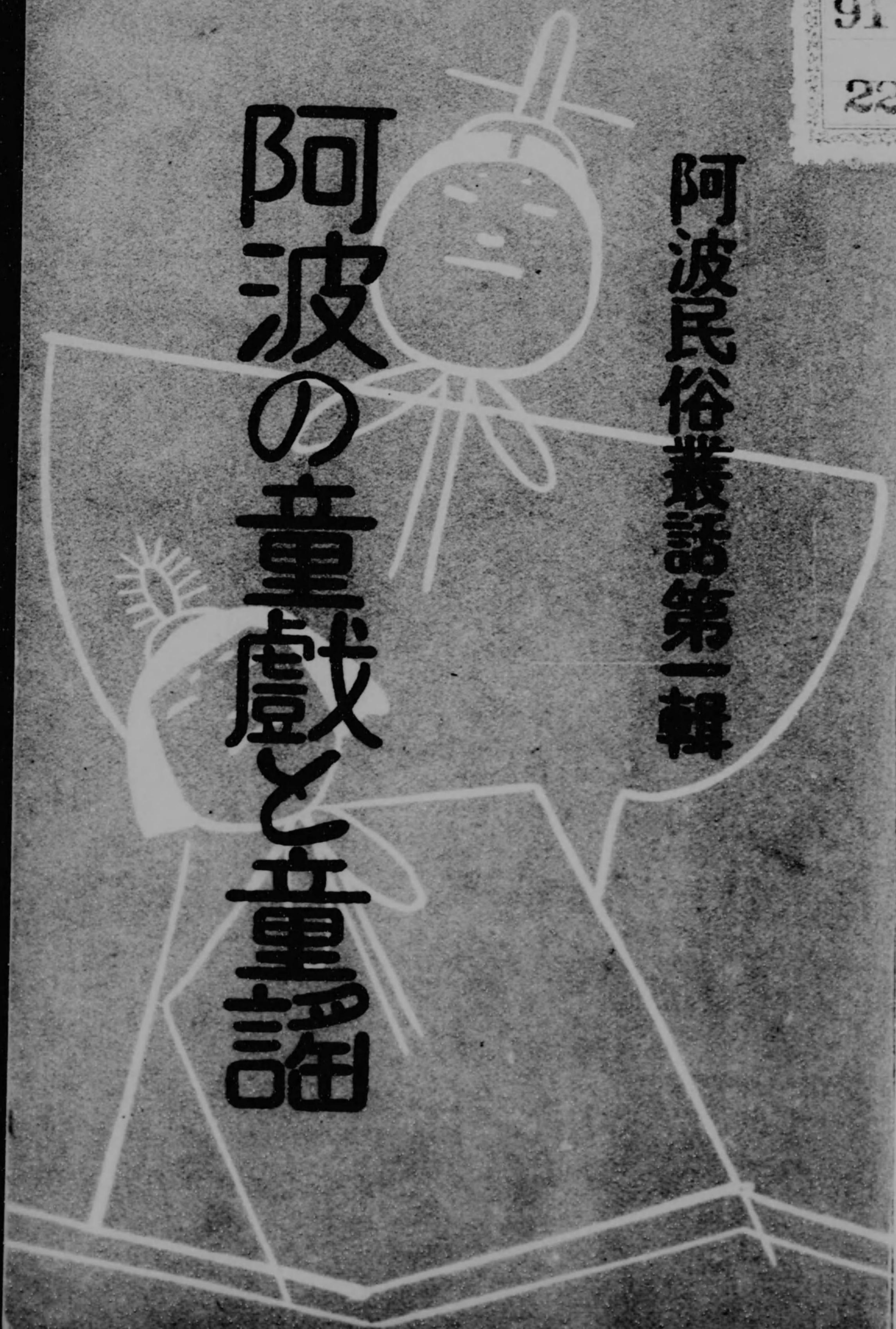
917
220



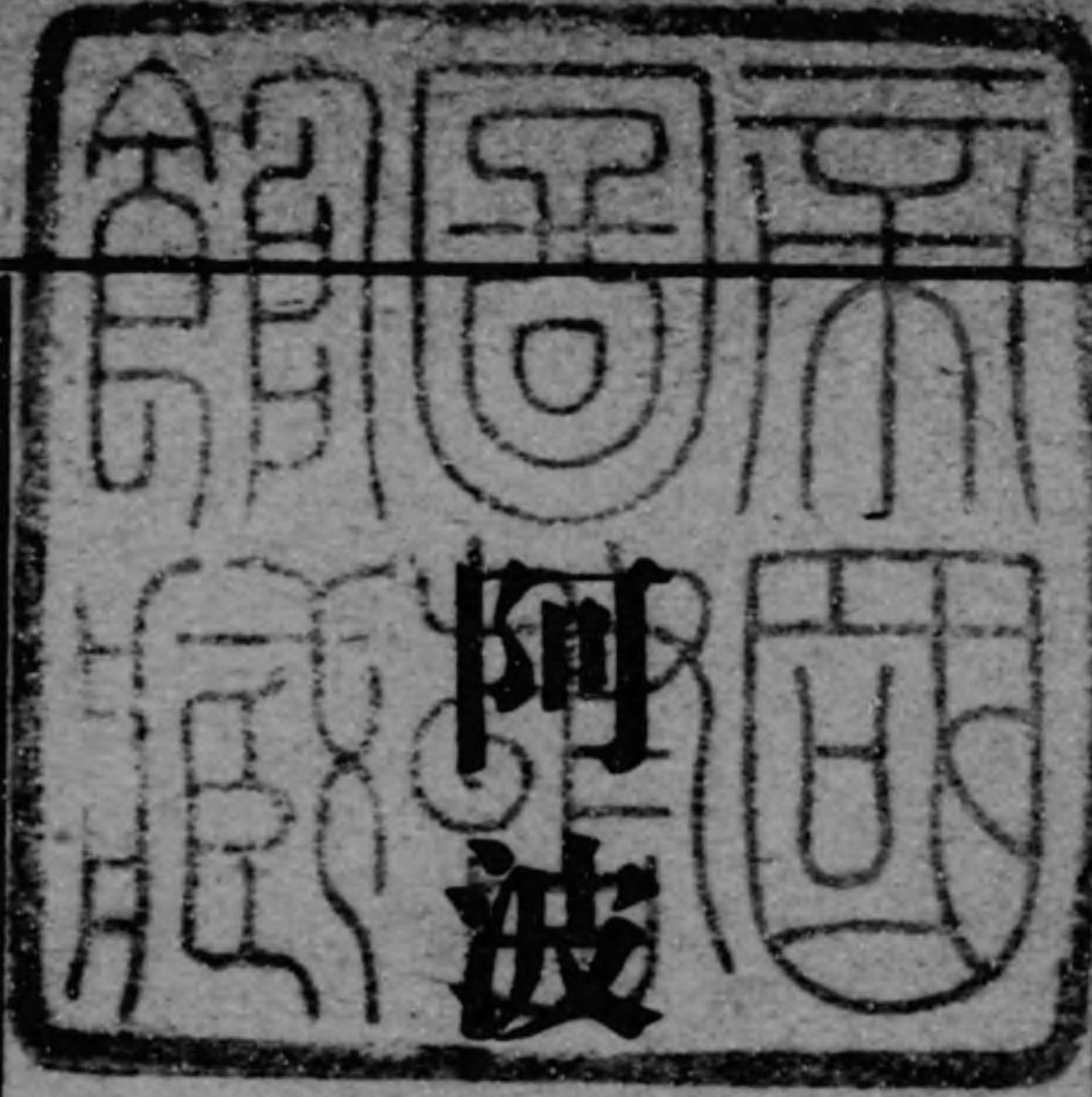
917
220

阿波民俗叢話第二輯

阿波の童戯と童謡



384.5
Mo55



阿波民俗叢話 第一輯

の 童戯と童謡

森 本 安 市 著

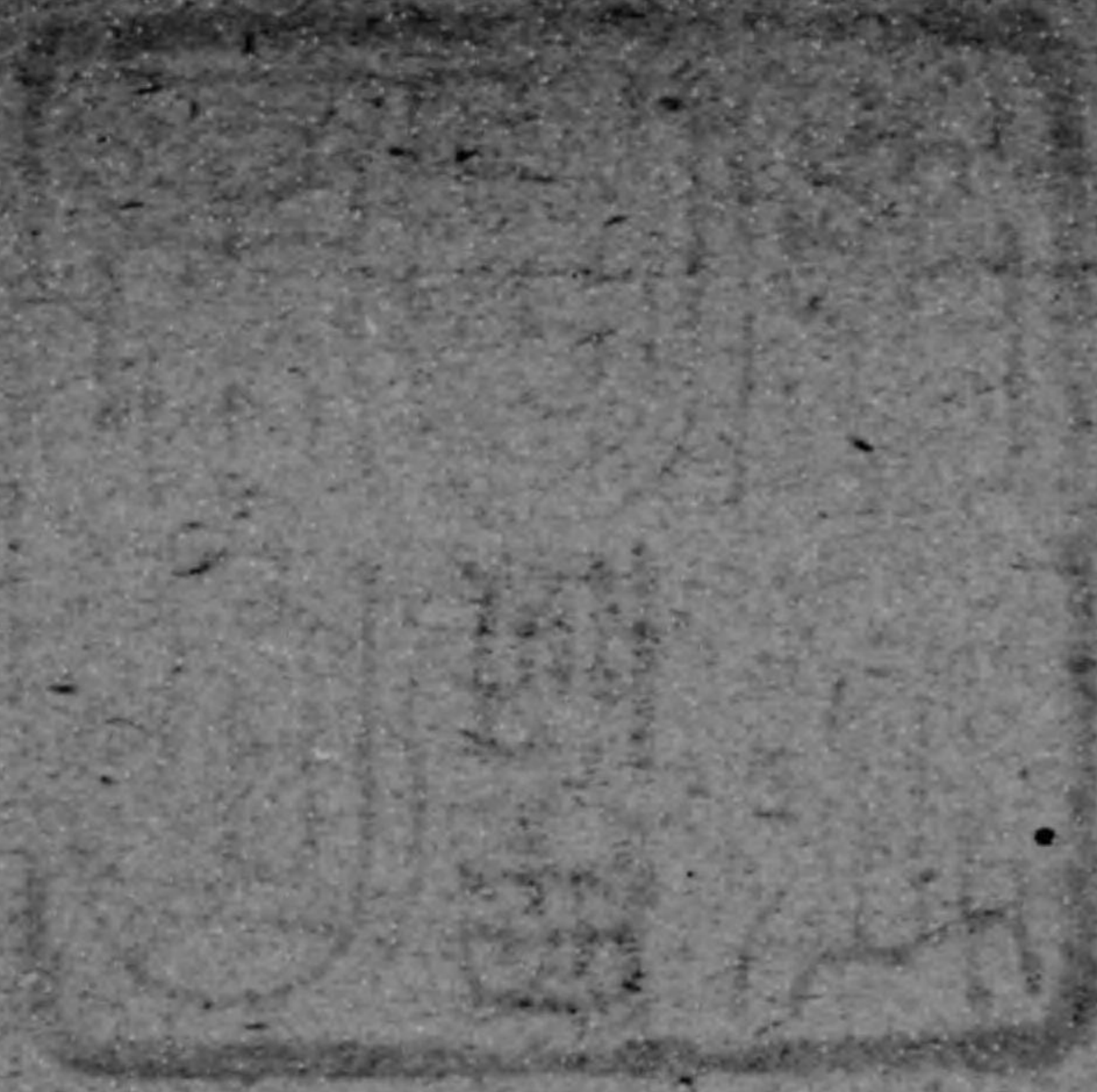




り取チカンハ



せんやり通





あばんけんけ



めごかめごか

阿波民俗叢話刊行の序

皇紀二千六百年を期して、我が國土の津々浦々迄戰時即應の新體制が實施されるに至つた。そして非合理的な一切の舊文化が否定され、新なる國民文化が再建せられようとしてゐる。然し此處に注意しなければならないことは、唯徒らに舊文化を解消するのであつてはならない。新は偶然に發生するものではなく、必ず舊なるもの、中に胚胎してゐることである。

我々の郷土阿波の文化並に風土の研究に就いては、幾多先人の努力によつて、或は歴史的に、或は地理的に深く考察が加へられて、阿波郷土史となり、徳島縣地理となつて我々に貴重な文献として提示されてゐる。然るに従來阿波の民俗即ち「現實の阿波の常民の生活を通じて過去を知る」といふ研究は全く未開拓の境ではなかつたかと思ふ。

ドイツに於ては、一九三三年ヒットラーが政權を執つてから、ナチスの理想は民族的全體國家の樹立にありとして、一切の國家的文化的政策も、その根本を「ドイツ民族」の積極的認識に置いて「ドイツ民族」の人種的清掃、固有文化の研究、確保、宣揚に努力し、永い間ドイツ民族文化の採集、研究に努力して來た民俗學が必然的に従來の日蔭の學問的地位から國學の嫡出子的地位に迄昂揚されて來たとの事である。

最近大政翼賛運動の一部としての文化會はかうした方面に着目しかけてゐる事は誠に歡ぶべき事ではあるが、この研究が非常に努力を要する爲に、ともすれば餘り固有文化を調査もせず飛

躍して新國民文化を樹立しようと思つてゐる事は誠に嘆かましい事である。

徳島縣民性の研究に就いても、唯歴史的な偉人を研究したり、戦亂を研究してゐたやうな郷土史では十分ではないのである。それよりも阿波の常民がどんな知性と情熱をもつて今日迄生活して來たかを十分に精査しなければならない。即ち我々の先祖はどんな衣服を着、どんなものを食ひ、どんな家に住み、どんな行事をなし、どんな習俗をもち、どんな心意現象をなして來たかをつぶさに洞察しなければならないのである。

私が微力乍ら顯彰して行かうとする所の阿波民俗叢話なるものは、よりよき阿波新文化建設の爲に捧げる貧しい所産であると共に、誰かゞ今保存して置かなければ永久に消滅するものを哀惜する心の營爲である。

さはれこの書は一面郷土阿波を離れて異郷にある人にとつては懐しい思郷の書であると思ふ。それは今三十歳以上の人々が幼き日に、その祖父母や、父母から、見せ且つ聞かされた思出の集積だからである。この意味から私は此の書を阿波に居る人よりも阿波に生れて今異郷に住む人に贈りたいと思つてゐる。

齒が抜ける、白髪が増す。そして老いて行く人達にとつては、此書はきつとなつかしい昔語りの種となつて行くであらう。残存して僅かに命脈を保つ固有の文化乃至頽廢文化には祖先の血が流れてゐる。爲に生きとし生ける人々は郷愁にも似た感激と慰樂を此處に與へられるものである。以上の意味に於てこの叢話刊行の完成に對して大方諸賢の御援助を期待する次第である。

阿波民俗叢話

(續刊豫定書目)

- 第一輯 阿波の童戯と童謡
- 第二輯 阿波の俗信
- 第三輯 阿波民間語彙
- 第四輯 阿波民の衣食住習
- 第五輯 阿波の民謡と労働娛樂
- 第六輯 阿波の昔話と傳説
- 第七輯 阿波の婚姻育産葬祭
- 第八輯 阿波の年中行事

阿波の童戯と童謡序

大東亞戦争の勃發により、我々は現實の生活を再編成しなければならなくなつた。今靜かに自己の生活を反省する時は色々な點に於て、米英の思想によつて不知不識の間に日本民族固有の長所が否曲されてゐる事を覺えるのである。今ナチス獨逸に於ては各方面に亘つて他民族に汚されない所の民族の純潔な血の所産を探求する爲に、民俗學が盛に研究されてゐると云ふ事である。

現在の各學校に於て課されてゐる運動即ち體操・遊戯・競技といふものを考察してみても、其の多くは米英兩國の模倣である事を痛感するのである。私は過去數ヶ年に亘つて、我が郷土阿波の常民の子供等が米英思想の未だ浸潤しない以前に於ける童戯と童謡といふものゝ採集に微力を捧げて來たのであるが、此所にその採集録を上梓して日本童戯再認識の資に供せんとするものである。阿波の童戯と童謡を採集してみても深く感じた事は、兩者が殆んど單獨に又對立的に存在するものではなく、兒童の生活面に於ける實相は、相結合してゐる事を看取する事ができたのである。

故に私は結合のまゝに於て種々分類を試みたのであるが、満足な解決ができないまゝに採録したものである。尙記録の終に地名を附記してあるが、それは採集地を示すもので、決してその地方のみに限定されてゐるといふ意味ではない。地方によつて多少の變化はあるものゝ、一つの童戯と童謡は徳島縣下一圓に伸展してゐるのである。

遊びに寢食を忘れた子供の頃は何時になつても懐しい思出である。この意味からこの書を觀れば心の故郷の記録ともいへるであらう。更に讀者の助援を得て増補し得るの一日も早く到來せんことを希望する次第である。

本書刊行に際し、同職の各位、女子師範教育實習生各位特に長友川崎數吉氏が表紙圖案並童戯の効果的方面の指導を株木博氏が口繪寫眞を賜つた事を感謝する次第である。

昭和十七年二月十五日

目次

第一章 集会的な童戯と童謡

- 一、通りやんせ
- 二、中の中の小坊さん
- 三、かごめ、かごめ
- 四、下駄かくし(草履かくし)
- 五、へびおはひご
- 六、へうたんおはひご
- 七、ちんちんかくし
- 八、人形買ひ
- 九、寄せっこ
- 十、狸さん狸さん
- 十一、牛か馬か
- 十二、官賊遊び(陣取り)
- 十三、めくら鬼
- 十四、おはひご
- 十五、かくれんぼ
- 十六、名前あて
- 十七、じゃんけん大将取り
- 十八、馬のり
- 十九、けり馬

第二章 相対的な童戯と童謡

- 一、けんけんばあ
- 二、石けり
- 三、橋の下の白鼠
- 四、足相撲
- 五、腕相撲
- 六、字かくし
- 七、石傳ひ
- 八、さはり
- 九、ねらんみやい
- 十、子守唄
- 十一、数へ言葉

第三章 單獨的な童戯と童謡

- 一、ちよちよちあばい
- 二、指さき遊び
- 三、波のり
- 四、たいのこたいたい
- 五、じゃんけん遊び
- 六、ひねくり合ひ遊び
- 七、指相撲
- 八、字かくし
- 九、石傳ひ
- 十、さはり
- 十一、ねらんみやい

第四章 玩具結合の童戯と童謡

- 一、毬つき
- 二、お手玉(おじやみ又は石など)
- 三、羽根つき
- 四、紙面(めんこ)遊び
- 五、縄飛び
- 六、ばい遊び
- 七、輪廻し
- 八、つきでつぼう
- 九、将棋遊び
- 十、石あて
- 十一、ラムネの玉あて
- 十二、ハンカチとり
- 十三、おやまさん
- 十四、めんあて
- 十五、竹とんぼ飛ばし
- 十六、釘打ち

- 九、風 あげ
- 十、竹 馬

十一、硝子めんあて

第五章 草木結合の重戯と童謡

- 一、椋の實拾ひ
- 二、松葉相撲
- 三、董の花相撲
- 四、つくつく坊さん
- 五、火
- 六、珠數玉つなぎ

- 七、花つなぎ
- 八、山吹のしんぬき
- 九、つばな撒き
- 十、ほうすき遊び
- 十一、麥笛と若葉笛
- 十二、まきの葉隠し

第六章 動物結合の重戯と童謡

- 一、螢取り
- 二、とんぼとり
- 三、かうもりとり

- 四、蟹つり
- 五、蛙つり
- 六、魚とり

第七章 天象結合の重戯と童謡

- 一、月を見て
- 二、雪遊び

- 三、風の日
- 四、雨降り

第一章 集会的な重戯と童謡



一、通りやんせ

通りやんせ通りやんせ
此所はどこか細道じや
天神様の細道じや
一寸通して下りやんせ
御用のない者通しやせぬ
此の子のせうのは祝に
御本さめに参ります

行きはよいくもどりはこはい

(徳島市内)

この遊びは徳島縣のいたる處でなされる子供等の遊びであつた。

遊び方は二人が手をつないで山型をつくりこの中を一隊の子供等が通りぬけ、歸りは又出来るだけすばやく通りぬけるのであるが、この時若し山型を作つた子供に背を叩かれるとこの子が負けになつ

て、山型を作るまはりになつて、この唄をうたひながら繰返して遊ぶのである。

阿波郡の土成地方では、これを「子取遊び」と云つた。そして次の様に遊んでゐた。かりに

甲組と乙組に分けて書いてみると、

甲組（二人の子供が手をつないでトンネルのやうに高くさしあげる）

乙組（七・八人が一隊になつて一人が親になつて先頭に立つ）

乙組「こゝはどここの細道で」

甲組「天神様の細道じや」

乙組「一寸通しておくれんか」

甲組「用事のないもの通しません」

乙組「天神様へ御札受けに」

甲組「行けば行く程もどりはこはす」

といつてトンネルを全部通してやる。

甲組（目を手で覆ふ）

乙組（その間にもとの位置の方へ通りぬける）

甲組は周囲の氣配で手を下におろすが、その時丁度手につかまつたら負けになり、負けた子がかはつてトンネルをこしらへて、又前の唄を繰返して遊ぶ。

靜かに暮れて行く農村に或は町の廣場に嬉々として唄ひ且つ遊ぶ姿は純真そのものであつた。市中

ではこの遊びは何時の間にかすたれてしまつたが、郡部の子供等はまだ處々にやつてゐるのはなつかしい子供の日の思出の種である。

唄は地方によつて少しづつ文句がちがつてゐるが、節は皆一緒である。例へば三好郡の佐馬地方面では次のやうになつてゐる

天 神 橋

此處は何處の細道じや

天神様の細道じや

少し通して下しやんせ

お札もないのに通しやせん

此の子の七つのお祝に

お札をもらひに参ります

通しやんせ通しやんせ

ゆきはよい／＼かへりはこはい

二、中の中の小坊さん

中の中の小坊さん

どうして背が低い
親の命日に海老喰ふて

それで背が低い

「おたてりなさい」

「はあ」

「おすわりなさい」

「はあ」

外の外の小坊さん

どうして背が低い

親の命日に海老喰ふて

それで背が低い

「おたてりなさい」

「はあ」

「おすわりなさい」

「はあ」

一さら二さら三さら四さら五さら六さら七さら八さら九さら十さら

十さらの上に

お姫さんのせて

やいとをすゑて痛や悲しや

「おとまへなさい。」

(徳島市蔵本邊)

遊び方は先づ鬼を一人定める。鬼は圓陣の中でしやがみ手を眼にあてゝゐる。十數人の手をつないだ子供等は輪を作り、

「中の中の小坊さん

どうしてせがひくい

親の法事に海老喰ふて

そんでせがひくい。

「おたてりなさい」

と唄ひながら鬼の周圍を廻る。

「お立てりなさい」といふと、鬼は

「はあ。おすわりなさい。」

といつて、目をつむつたまゝ誰でも任意の人をおさへその子の名をあてる、もし名があてられたらその人が鬼にかはつて遊ぶ。(名東郡國府邊)
この遊びは、阿波の地方々々で唄も遊び方も多少の相違がある。徳島市の矢三あたりでは、一人の

子供を中に鬼としておく、鬼は眼を手でかくしてしやがませる。鬼は即ち小坊さんである。まはりの子供達は手をつないで圓陣を作り横に廻りながら唄ふ。

「小坊さん小坊さんどうして背が低い」

小坊さんが唄ふ

「親の日に海老食ふて、それで背が低い。」

まはりのものが、

「おたてりなさい。」

と云ふと小坊さんは

「はあい」と云つて立つ

まはりの者が、

「○○さんの後に誰が居る」といふと皆そこで立ち止る。

眼をとぢた小坊さんは後へ向いてその人をつかまへてその人の名をあてる。もしあたつてをれば、

そのあてられた人が小坊さんに入れかはるのである。

もし間違つて居れば、外輪の者が聲を揃へて、

「そりや大きな大まちがひ」

と唄ひながら廻りはじめ前の言動を繰返すのである。

晚鐘が鳴つて、夕日が街の屋根に沈んでもこの遊びに熱中した子供等の聲は中々消えなかつたもの

である。

勝浦郡小松島町の兒安邊での唄は次の様に文句が稍々異つてゐる。

中の小坊さん

どうしてせがこんまいの

十日の晩につるとかめ

つつばつた〜

「うしろの正面だあれ」

「おすきなお方」

三、かごめ、かごめ

かごめ、かごめ

かごん中の鳥は

何時出て遊ぶ

やみ夜の晩に

杖ついてつつばつた

うしろはだあれ

(板野郡松島邊)

遊び方は「中の中の小坊さん」の遊びとよく似てゐる、稍簡單であるに過ぎない。即ち一人の子供を目をつぶらせてしやがませ、外輪の大勢の子供等は手をつないで右の唄をうたひながら廻る。立ち止つた時「うしろはだあれ」で自分の眞後の子供の名をあてれば、あてられた兒が籠の中の子供に入ればはるのである。

この遊びは全國津々浦々にある遊びで、阿波特有とはいへないが、子供等の最も多くして來た遊びであつたが故に大切に保存したいものである。

板野郡撫養町木津あたりでは次の様な唄でもつて、このかごめがなされてゐた。

坊さん坊さんどこへ行く

あの山越えて酢買ひに

このかんかん坊主、くそ坊主

「後の正面だあれ」

少し下品な唄であるが子供等は、全くその意味なんかは考へず夢中になつて遊んだものであつた。

四、下駄かくし

下駄かくしくねんぼ

まないたにのせて

やいとをすゑて

いたやかなしや

かなぼとけく

(徳島市内)

めい／＼の下駄を片足づゝならべて、右の唄を皆が聲を揃へて唄ひながら數へていつて、最後にあつた下駄の持主が鬼になる。鬼が目をつさいでゐる間に、思ひ思ひに下駄をかくし、「ようつしや」といふと鬼は眼をあけてかくした下駄を探す。全部探し出す事ができれば、又前の唄をうたひながら新しい鬼を定めて、下駄をかくしたのをさがさせる。鬼がいくらさがしてもわからない時は「あげた」と言へばかくした者はそれ／＼自分の下駄を出して來て又くりかへし遊ぶのである。その時鬼に見つけられなかつた人は次の番にもかくす特權が與へられるのである。

唄の文句は地方によつて多少異つてゐる。

草履かくしくねんぼ

廻まわの上に

麥や米やつんどいて

よりつく、よりつく

よつて行く、よつて行く

(板野郡松島邊)

五六人以上の子供等は各自下駄を並べ右の唄をうたひつゝ數へ、最後になつた下駄の持主が鬼になり目をつむると、その間に他の者は思ひ思ひの場所に下駄をかくす。

「もうえゝか」「もうえゝは」

と云ふと鬼は眼をあけてかくされた下駄を探す。下駄をかくした者は片足でびよん／＼けんけんをしながら「じよじよ(草履)買ふてんか。はだしで冷たい。」とからかふ。鬼は一人二人と下駄を探して行くが鬼の見付け得ない者は、そつと下駄を陣につけられると、鬼は負けで、も一度やりなほしになつて又鬼になつて探さねばならないのである。

其の外文句のすこしづゝ變つてゐるものには次の様ながある。

下駄かくしくねんぼ

俎の上に

お姫さんのせて

やいとをすゑて

いたやかなしやかなぼとけ

(徳島市内西横町邊)

じよんじよ(草履)かくしくねんぼ

まないたの上に

かみそりといでおいとて

どいつもこいつもそつてやらう

そつてやらう

(美馬郡貞光邊)

板野郡瀬戸町堂浦邊では遊び方がやゝ異つてゐる。子供等が大ぜいよると、靴・草履・下駄をはいたまゝ一度に脱ぎ飛ばす。その時履物が下へ向いた者が隠される。上へ向いたものは下へ向いたものはきものを隠す。隠された者は其の間目をかくし、かくし終つたら合圖をすると、隠された者は、一齊に探す若し見當らない場合は、かくした者に「親をくれ」と云ふと隠した者は「親をやる」といつて出して来る。かくす時はなかく見付けられないやうに石の下や木の上や物の影等を考へて隠すのであるが、隠すのも探すのも協同してなす處が一寸風變りである。

五、へびおはひじ

これは三好郡佐馬地地方にある鬼ごつこの一種である。

「今年のぼたんはよいぼたん」

(大勢が聲をあはしてうたふ)

(次は話し言葉で)

「お耳にまはしてすつべんぼん

も一つまはしてすつべんぼん

足にまはしてすつべんぼん

も一つまはしてすつべんぼん」

といふとへびになつたものが

「皆さん遊ばや」

といふと一同は

「あそばん」といふ。へびは

「お菓子をあげるから遊ばや」といふ。一同は「さあ〜」といふとへびも一同も皆聲を揃へ

て

「今年のぼたんはよいぼたん

お耳にまはしてすつべんぼん

も一つまはしてすつべんぼん

足にまはしてすつべんぼん

も一つまはしてすつべんぼん」

とうたふ。するとへびになつたものは、

「もういのもう歸らう〜」といふと一同は「どうして」といふとへびは「ごはん」といふ。

一同は「なんのおさい。」といふと、へびは「へびのおさい」といふ。一同は聲を合はせて、「あなたの妻はへび姿、きたな・きたな。」といつて、一同が逃げると、へびになつたものは追つかけてとらへ、とらへられた者は、次にへびとなつて初めからの動作を繰返して遊ぶのである。

六、へうたんおはひ

地面に直径一間と二間位の二圓接續のへうたんの圖を描き、數人の子供はその中に入り鬼はその外に居て、鬼をからかひ乍らへうたんの狭い所を歩きするのを鬼は外部から捕へる。捕へられた者は鬼になり交替する。若し中に居るもので線より外に出た場合は反則となつて鬼にならなければならぬ。この遊びの興味ある所は狭い場所をうまく通りぬける所にある。(板野郡堂浦邊)

七、ちんちんかくし

地面に直径四・五十纏の圓形を描き、四・五人で遊ぶ遊戯であるが、その中の一人が鬼が目をおさいでゐる間に、他の三人はめい〜小さい硝子片とか白石を圓内に隠す。隠した者が「ようつしや」といふと、鬼は大圓の中に隠されたものゝありさうな所へ、三つ小圓を描く、この時その小圓の中に隠したものがいつてゐた場合、負けとなり鬼が交替するのであるが、若し二人以上該當者があつた場合は「じゃんけん」をして一人の鬼を決定するのである。(勝浦郡勝占邊)

八、人形買ひ

徳島市内の女兒の遊びに「人形買ひ」といふのがある。遊ぶ子供は人形買ひが一人と店の主人が一

人と多勢の人形になる子供とで遊ぶのである。

人形買ひ「一丁目か」

主人「まだく」

人形買ひ「二丁目か」

主人「そこだ」

人形買ひ「トントントン」(戸をたたく)

主人「どなた」

人形買ひ「京から来た人形買」

主人「三べん廻つて裏からおはいり」

人形買ひは、家に入つて並んですわつてゐる、人形の兒の胸を抑へて行く、抑へられた人形の兒は、できるだけよい聲で「おぎやあ」と泣く、人形買はそのうちよい聲のすきな人形の兒を買つて行くのである。

人形になつた兒ができるだけよい聲をだして早く人形買ひに買つてもらはうと苦心する女の子らしい心情が面白いと思ふ。(徳島市内)

九、寄せつこ

寒けりや寄つてこい

爺たこ、婆たこ

すつとんとん

寒い北風が野面といはず、町辻といはず、校庭といはず吹きまくる頃である。建物の直角になつた日溜りで、子供等は多勢背中を内側に幾重にも重なり、大聲をあげ乍ら右の歌を歌ひながら中心へ中心へと割り込んで行く。肩をすりあげすりあげ中央に向つて押して行くとどんな寒さも解消されるのである。

子供は風の子、埋火にあたるかはりに此の素朴な遊びに十分の暖を取るのであつた。

(海部郡浅川邊)

十、狸さん狸さん

一人が狸になつてしやがんで(うづくまる)寝たまねをする。その前に大勢の子供が手をつないで次の様な問答を狸とする。

多勢「狸さん狸さん。遊びにおいでんで。(行かないか)」

狸「まだねよる。」

多勢「狸さん狸さん遊びにおいでんで。」

狸「今顔洗ひよる。」

多勢の子供は同じ言葉を繰返してゐる間に、狸は働く準備ができる。

多勢「狸さん御馳走して下さい。水を飲まして下さう。」

狸「鳥を踏まないやうにこちらへおいで」

といふと、多勢の子供は

「ふんだつた。(踏んでやつた)」

と叫ぶと、狸は怒つて捕へに来る。皆は一生懸命に逃げ出す。この時狸に捕へられるとその者が狸に交替し、又始の様な文句を繰り返して遊ぶのである。

鬼ごつこの一種であるが、兒童に不知不識の間に朝の生活の次第を教へようとする所に面白い所がある。(徳島市渭北邊)

十一、牛か馬か

二人以上の子供等がよつてなす遊びである。めいめい草履をもつて投げる。その時表が向いたら馬、裏が向いたら牛になる。

馬になつた子は牛になつた子の草履を隠し、牛にさがさせ、さがし當れば又繰返して遊ぶのである。(海部郡牟岐邊)

十二、官賊遊び (陣取り)

子供大勢が二組に分れ各一方に陣を定める。まづ兩組の王様が

「官賊さう」

といつてじゃんけんをして勝つた方が官軍になり、まけた方が賊軍になり二方より各その陣を攻めるのであるが、兩軍はそれぞれ作戦を練つて早く敵陣を取ることに努力するのである。即ち兩軍互に陣につくと、皆一しよに

「さうたう」

といつて、戦闘開始の合圖をするのである。兩軍はそれぞれ一名二名三名と敵陣を伺はせ、陣をみて敵陣を奪取することを企てるのであるが、その途中で出合つた時、若し味方の人數が敵の人數よりも多い時は捕虜とすることができるのであるから、双方は味方の者を物蔭に伏せて人數を少くみせて敵の近づくを待つて急襲して捕虜を増加しその多きをもつて勝とし又敵陣を早く奪取した方が勝となるのである。

男女兒とも相當大きくなつた子供等の遊びである。(名東郡佐那河内邊)

十三、めくら鬼

始めにじゃんけんで鬼を一人きめる。鬼は手拭で眼をふさぎ兩手を擴げて進む。場所は大てい限られた部屋或は廊下である。鬼以外の者は逃げまはつて容易に捕へられないやうに次の唄をうたひなが

ら両手をたゞいて鬼の聴覺を混亂させる。

由良さん 由良さん

手の鳴る方へ

捕へたら鬼は頭部肩などを撫で、その人の名前をあてるのであるが、あてられたものは鬼をかはるのである。男女兒共通の遊びである。(勝浦郡生比奈邊)

十四、おはいご

おにごつこの事である。じやんけんで一人の鬼をきめ、仲間の者は四散して逃げる。その時豫め軒の柱とか立木を「どう」に定めておき鬼に追はれて苦しくなると「どう」に着けば休む事ができる。又逃げてゐる途中でも、苦しくなるとその場につくまんで(うづくまる)「もんき」と云へば休む事ができるのである。捕へられたものが鬼になる遊びである。(勝浦郡小松島邊)

十五、かくれんぼ

じやんけんで鬼をきめる。鬼はその間柱とか立木によつて眼をふせてゐると、逃げる番の者は、その間に適宜一寸見付かりにくいやうな場所を選んで隠れてゐる。そして「ようつしや」といふと鬼は

直ちに探しに行くのであるが、一人でも見つけると皆は出て来て、見付けられた者を鬼とし再びくりかへし遊ぶのである。

若し二人がみつげられると、二人がじやんけんをして一人の鬼をきめるのである。

(勝浦郡多家良邊)

十六、名前あて

冬の夕暮時の遊びである。大勢の子供等はめい／＼自分の着てゐる羽織をぬいで頭にかむり屏や軒場にもたれてしやがむと鬼が来て、そのうちだれか一人を羽織の上から抑へて名前をあてる、あつた者はかはつて鬼になるが當らないと鬼を續行し、あたるまで次々と羽織をかむつた子供達を抑へて行くのである。

日が暮れて薄暗くなつた時、陣取りや、まりつきなどの遊びが出来なくなつた時する遊びである。

(海部郡牟岐邊)

十七、じやけん大将とり

子供十人位が並列して一番左翼に大将が居り、それより右翼の方へ中將少將大佐中佐といふやうに階級的にならんでゐる。一番下座のものよりじやんけんをして勝つたならば順次上の方へ進む負けたりその地位のものとかはり大将に進むことをあせり力を入れてじやんけんをする遊びである。冬の日

溜とどろの蔀とどろなどにもたれてなす重戯である。(板野郡堀江邊)

十八、馬のり

他國にある「鹿遊び」によく似た遊びである。先づ一人の親を作る。親は塀又は蔀等に直立してこちらへ向いてもたれると、次のものは腰部へ頭をもつて行きうつむいてしつかり腰につかまり馬の胴をなす。順々に走つて来て馬の胴へ飛び乗り、乗り得たならば、親とじゃんけんをしまけたら馬の胴になつた後へつながつて胴になり、勝つたら、また馬に乗れるのである。もし親がじゃんけんにかつと、乗り手になる事ができ、一番最初胴になつてゐたものが親に替るのである。又馬に乗りそこなつて地面に落ちたものも馬の胴にならなければならぬ。冬向の男兒の遊びである。

十九、けり馬

男の子の遊びに「けり馬」といふのがある。親になつた子が立つと一人の子供が後方から屈して親の腰につかまり胴をなし兩脚をびんびん跳ねてゐる。親になつてゐる子供は胴になつてゐる子供の兩眼を脇下にし塞いでゐる。あたりに隙をねらつてゐる子供達は馬にけられないやうに馬の胴の上に乗る得たれば又再び胴乗りができるが、乗る途中馬にけられたり、乗りそこなつて墜落等すると、馬の胴に替らなければならぬ。替りの者ができると胴になつてゐたものは親に替り、親であつたものは乗りてになることができるのである。(海部郡川西邊)

第二章 相対的な童戯と童謡

一、けんけんばあ

地面に直径五十糎位の圓形を左圖の様を描く、圓の数は任意である。



子供等はけんけん(片足で飛び進む)で圓形の中をとびすゝむのであるがまづ扁平な石とか瀬戸物のかけら、硝子等を手前の弧線の所に立つて⑤の圓に入れる。はめ得たならば①をけんけんで行く「ばあ」で②③に兩足を下し④の中に入れた石を取り又けんけんで歸つて来て弧線の所から⑤に石を投げ入れ次に⑤④の順序に石を入れてけんけんばあをして出發點に歸つて来るのであるが、石をなげた時に圓形の線にかゝつたり外へ出た時は「つまつた」といつて相手が替つて行くことになるのである。尙圓の数は上達したがつて次第に増加する。

これも十才位以上の女兒特有の遊びある。(徳島市内)

二、石 け り

地面に左圖を描く

四	三	二	一
五	六	七	八
九	十	十一	十二

一・三人の女兒で勝負をするのであるが、じゃんけんによつて行く番をきめ先づ各兒は扁平な石を(一)の劃内に入れ外線に觸れたり、外へ出たりしない時は、けんけんでその石を(二)(三)(四)(五)(六)(七)(八)(九)(十)(十一)とけり行くのであるが蹴つた石がその途中劃線にかゝつたり目的の劃外に出ると「つまつた」といつて、そこで中止し相手のものがかはつて行くのである。そして若し(一)へ入れた石を無事(三)までけり終へて歸つてくると(二)(三)と順次入れる處が進んで行くわけである。尙二回目自分のまはりが來た時は前回の自分の成績をひきついで劃を進め得るのである。此の遊びは近時あまり見られなくなつてゐる。(麻植郡山瀬邊)

三、橋の下の白鼠

この遊びは雨の日とか、寒い冬の日に炬燵にあたりながらする室内の遊びである。

皆が右又は左の片手を擴げて出してゐる。先づじゃんけんをして勝つたものが、自分の出してゐる親指から次の唄にあはして指を一本づゝおし數へて行く

橋の下のしろねずみ

草履をくわへてきい〜きい

即ちハ、シノ、シー、タノ、と一本一本かぞへて行くのであるが、最後に抑へられた指は、掌の中へ折り込む、そしてその次の指から始めて、これを繰返し、指を全部早く折り込んでしまつた者が勝ちとなる。指を數へ抑へる人は勝負が一回終るまでは變らぬ。唄をうたふのは手を出してゐる人もおさへてまはる人も一しよにうたふのである。(三好郡佐馬地邊)

四、たいのこたいたい

冬など炬燵にあたつてなす女兒の遊びで二人が向ひあつてあたくも拳のやうに両手を繰織り拍手をして二人の掌を合せなどしこの唄に合せて遊ぶもので、勝負ごとでなく、手拍子に合せて唄ふことに面白さがある。

- 一つひよこが米のめし タイノコタイタイ
- 二つ船には船頭さんが タイノコタイタイ
- 三つ店屋の番頭さんが タイノコタイタイ

- 四つ横濱郵便さんが タイノコタイタイ
- 五つ醫者さん薬箱 タイノコタイタイ
- 六つ昔はよろひ着て タイノコタイタイ
- 七つ泣く子にやひねり餅 タイノコタイタイ
- 八つ山伏ほら貝を タイノコタイタイ
- 九つ乞食がお椀持つて タイノコタイタイ
- 十は殿様お馬に乗つて タイノコタイタイ
- 十一巡査がシャベル持つてタイノコタイタイ
- 十二兄さんが新聞よんで タイノコタイタイ
- 十三三味線ビンビラ タイノコタイタイ
- 十四新年お芽出度う タイノコタイタイ
- 十五お月さんがまんまるい タイノコタイタイ
- 十六六兵衛さんが車ひいて タイノコタイタイ
- 十七ひめさんがすそからけてタイノコタイタイ
- 十八濱邊でハンカチ振つて タイノコタイタイ
- 十九米屋の精米所が タイノコタイタイ
- 二十仁徳天皇萬歳 タイノコタイタイ

(三好郡靈間邊)

五、じゃんけん遊び

一、じゃんけん歩み

二人でじゃんけんをする。場所は廣場とか長い廊下の様な所が利用される。ばあは五歩ぐうは四歩ちよきは二歩歩けることにきめ、目標点をきめておいて、二人が各じゃんけんの結果をきめた歩數だけ大中に飛び歩いて早く出發點に歸ることを競ふのである。例へば甲と乙がじゃんけんをして甲がばあをして乙がちよきをしたとすると「ばあ」は「ちよき」にまけるから甲は一步も行けないが乙は二歩だけ進むことができる。又甲が「ぐう」をし乙が「ちよき」をすると乙はまけて一步も進めないが、甲は四歩だけ進むことができるのである。(徳島市内)

二、じゃんけん陣取

二人以上の子供がすることのできる遊びである。今四人でする場合をかゝげるに、先づ地面へ直徑一米位の圓形を描き外側に四人が對蹠する。そしてじゃんけんをして一番でかつた者は二十指痕だけの面積をとり二番で勝つたものは十六指痕三番になつたものは八指痕だけ自分の蹠前に地面積を印し四番目の者は零となるのである。之を繰返し次第に自己所有の面積を擴げ、その地積の多少に依て順次勝敗を定めるのである。長閑な春日、小春日和等々女兒の多くしてゐる遊びである。(徳島市内)

六、ひねくり合遊び

(つねり合ひ)

二人が各左手を出し、右手の親指と人さし指をもつて相手の左手の甲を互にひねりあつて遊ぶのであるが、次の様な唄を歌ひ乍らする。

いばらのとげがたつた
にはとりがつゝいた
さんしよのばらがき
しじみの貝がはさんだ
ごつとい虫がさした
麥のいがじや
なますのひげがついた
はみ(蝮)がかんだ
くりのいがはどんなものじや
とんびのくちばし
とびあがる程痛いぞ

始めの程は軽くやつてゐても次第に強くなつてしまひにけんくわになることもある。

(板野郡板東邊)

七、指相撲

二人の兒童は各右手を出し握合ひ、親指を上に出し、互に抑へつけ合つて、抑へつけられた方が負けとなる。(徳島市内)

八、足相撲

両足をなげだして座し、先づ兩人互に右足を立て両手をもつて太股を扼し互に、倒し合ひをする。此の時手を離したり下に手をついたりしてもまけになる。(徳島市内)

九、腕相撲

兩人右腕を出し肘を床面に立て互に倒し合ふ遊びである。お互に倒されまいとして力を入れる所に興味があり、三人げし、五人げしとその雄を競ふのであるが、年のいつた子供達の遊びである。

(美馬郡脇町邊)

十、字つなぎ

白紙面や石盤上に任意に「イ・ロ・ハ・ニ」等同一文字を二回以上書き散らし、二人して交互に

「イ」と「イ」「ロ」と「ロ」といふやうに線で結ぶのであるが、他人の引いた線と自分の引かうとする線が交錯しないやうに工夫して引く處に面白味があるのである。

十一、字かくし

二人のものが任意の地面にかくして文字を地面に書きつけ、終はつたら軽く土で蔽ひ、お互に相手の字を探し當て、勝負をきめる遊びである。この場合大體文字の書いた場所は知らせるか、近くでかくすのであるから書いた場所はわかる筈である。(海部郡鞆奥邊)

十二、石傳ひ

敷石飛石が長く連つてゐる場所例へば溝岸、堀端等での遊びである。相手は石の上をけんけんで跳び歩いてゐる。今相手の者が石の上にある時は捕へることができないが、石と石の間を飛び歩き、両脚が石を離れた時に捕へると勝ちとなる。負けたものはかはつて鬼になり、相手をつかへることに努力する處に興味があるのである。又鬼が見てゐない時は普通に歩き傳つてもよいが、「みつけた」と鬼に云はれたら鬼になる定めになつてゐる。(徳島市内)

十三、さはり

遊ぶものは地面任意の處に一線を引く、次にその線に平行に一線を引くこの間隔は普通一米位である。逃げる番のものと捕へる番の者に分れて相對峙する。「よつしや」で捕へるものは、出来るだけ手を差伸べ相手にさはる(觸れる)やうに努めるのであるが、此の時逃げる番のものは自分の領域線から後へ三十糎以上後退できないやう塀際とか葎側に位置してゐる。捕へられたら入變つて又勝負を初めるのである。

十四、ねらんみやい

にらみつこの事である。二人の子供が相對して、めい／＼相手を笑せるやうな表情をして、相手を早く笑せることに努めるのである。最近やつてゐる。

にらみつこしましよ

わらふたらまけだ

うんとこどつこいしよ

の歌を歌ひあつてにらみつこを始めるのは阿波元來の童戯でなく、小學校の唱歌に影響されたものである。(徳島市内)

第三章 單獨的な童戯と童謡

一、ちよち・ちよちあばば

やつとはひ出した頃の子供にさせる遊びである。

ちよち(両手をたたく)

あばば(掌で口を軽くたたく)

かいくり(両手を交互に廻す)

おつむてん(頭をたたく)

おつむは頭のこと、阿波の各家庭で生れた子供に最初に教へる童戯はこれである。

二、指さき遊び

室内でも戸外でもできるひとり遊びともいふべきものがこの遊びである。両手の指を次の唄にあはせながら指と指を合せて行くのである。

子供と子供とけんくわして(小指と小指と合す)

親、親が怒つて(親指と親指を合す)

人さんのあいさつに(人さし指をあはす)

なか(すまんとおつしやつて)

べにやさんが(紅さし指を合す)

すました、すました。

大人或は年のいつた子供が幼い兒にして見せて喜ばせるのである。

三、波のり

阿波の南方沿岸地方で夏日行はれる勇壯な童戯に波のりがある。子供等は太平洋の黒潮の寄せる遠淺の濱邊へ幅三十糎長さ一米位の板を持つて沖へ泳ぎ出す二・三百米も出る大きなうねりは今にもしぶきをあげて巻かんとする時板を胸にあて波の峯を背にして兩脚をばたつかせると巻波の前へ半身をのりだし板にのつて沖の方から岸邊へ寄せて来る。大波に子供等の乗つた板は次第次第に岸邊の方へ打ちよせられて来る。濱に打ちあげられると又沖へ泳ぎ出して之を繰返すのである。實に南海の子供らしい遊びである。

四、子守唄

赤坊をおひこで背負つて、子守奉公にやとはれた十二三のおもりさんが街道をあちらに行つたりこ

ちらに來たりして歌ふ子守唄は今では非常に稀にしか聴くことができなくなつたが、三十年前位迄は、夕暮の街道におひこに赤ん坊の子守の叫び唄は阿波の風物でもあつた。今その數種を拾つて見よう。

讃岐高松葵の御門左万字は阿波の殿

よしよこ

咲いた櫻になぜ駒繫ぐ駒が勇めば花が散る

よしよこ

坊主頭に米粒のせて蛸の丸酢大味な

よしよこ

今年豊年穂に穂が咲いて榊にまがりて箕ではかる

よしよこ

鐘がごとんと鳴りや早いにたがる、こゝは寺町いつも鳴る

よしよこ

阿波で一ばん名をあげたのは五百羅漢に筈が島

よしよこ

何をくよく川端柳よ水の流れを見て暮す

よしよこ

いやれはらゝ、夜はほのぼのと鐘が鳴るぞよ寺々に

よしよこ

此處ではやるにやお江戸ではやる卅振袖四十島田

よしよこ

山は焼けても山鳥飛ばぬ可愛我が子にひかされて

よしよこ

人に仕へりや七里の膝を八重に折れとや氣に入らぬ

よしよこ

花が見たけりや徳命へごされ徳命八重梅寺に咲く

よしよこ

(板野郡撫養邊)

※

守は守連れ、子は子供連れ

大けな姉さん、殿御連れ

うちのとつちやん、淨瑠璃好きで

根深淨瑠璃、節がない

うちの裏には、とんぼがとまる

とんぼとりたや、竹欲しや

うちの裏藪、狸の古巢

出たり、ひつこんだり、また出たり

(板野郡板西邊)

うちのおとつちやん山行て遅い

猪にかまれたかやれ遅い

ねんねする子にや赤べど(着物)着せて

ねんねせぬ子にや縞のべど

ねんねねんく、ねさせておくれ

何がねられうぞ、叩かれて

ねんねしなされ、まだ夜は明けぬ

明けりやお寺の鐘が鳴る

(勝浦郡小松島邊)

子守唄は各地に非常に多いが、以上のものは縣下いたる所で唄はれる代表的なものである。

五、數へ言葉

阿波の子供等は、土めんをかぞへたり、其他物や人数を數へる時に次のやうな言葉を出す。

チユー、チユー、

(二)

(四)

(六)

(八)

(十)

即ち二つづゝ數へて十の數を定めるのである。

又着物の着てゐる數を數へるには次の言葉を用ひる。

フク(福)

(一枚)

トク(徳)

(二枚)

サイハイ(幸)

(三枚)

ピンボウ(貧乏)

(四枚)

カネモチ(金持)

(五枚)

冬向等四枚も重ねて着てゐると、「おまい貧乏じや。」等云はれるので四枚を着ることをきらふのである。(徳島市内)

第四章 玩具結合の童戯と童謡

一、毬つき

女の子の一ばん普遍的な遊びは毬つきである。毬には古くは色糸をもつて美しくかがつたものを使つてゐたが、三十年このかたは、ゴム毬を使用するやうになつた。子供等はその毬をつきながら脚の下をくぐらせたり、後から前へぬけさせたりして次の様な唄に合せ節面白くつくのである。

をちさんとせ、をばさんとせ

おほさか おさかで どん

やつやでどん

やつやまかせでおかぐらほい

いくらです。五百です

もうちつとまからかすからかほい

おまいさんのことなら まけとくわ

ひい、ふう、みい、よう、いつ、むう、

なあ、やあ、こゝのつこじきがとんできて

おうふくでらのかねがなる。

みなさん、いつたいかしました。

二度とおはらひいたしましよ。

(名東郡國府邊)

又美馬郡郡里邊では

うちの裏のちよ〜ぎすが

何が悲しうて泣いてゐる

たつた一人のぼんさんが

山からころげて今日で七日

七日と思たら十五日

十五日がすんだなら

ころごうおさめに参ります

行きはよい〜な

もどりはこはいな

人に見られてちよいとかくす

エンチノリン

ヒイ、フウ、ミイ、ヨウ、イツ

ムウ、ナ、ヤア、ココノトウ

右の唄をうたひながら毬をつくののであるが、「うちのうらの」で二つゆつくり毬をまたぎ次に「ちよ〜ぎすが」で三つ早く毬をまたぎ、この動作を繰返し、「人にみられて」で二回ちよつとかくすで早く二回またぎ、「かくす」の「す」の時に毬が外から見えない様に着物で包んでしまふ。そして「エンチノリン」で毬を落し毬を早くまたぐこれをくりかへし何回も続く程よいとするものである。尙座して両手のみを使つてつくものには次の様なものがある。

即ち「かねつけ」の時は毬を高くつきあげて齒に「かね」をつけるまねをし「かみとき」の場合も同じく髪をとくまねをするのであつて長く續けつけるを勝ちとする遊びである。

手毬つき唄

どんどやいせどんど
どんどや二どんど
どんどや三どんど
どんどや四どんど
どんどや五いあがり

おちくかんどが一もんめ
おちくかんどが二もんめ
おちくかんどが三もんめ
おちくかんどが四もんめ
おちくかんどが五いあがり

かみとき一もんめ
かみとき二もんめ
かみとき三もんめ
かみとき四もんめ

かみとき五いあがり

かねつけ一もんめ
かねつけ二もんめ
かねつけ三もんめ
かねつけ四もんめ
かねつけ五いあがり

やまのをばはんこくばかきが一もんめ
やまのをばはんこくばかきが二もんめ
やまのをばはんこくばかきが三もんめ
やまのをばはんこくばかきが四もんめ
やまのをばはんこくばかきが五いあがり

(名東郡佐那河内邊)

手毬つきの數を數へる爲に昔から阿波の子供等は次の様な數へ唄を用ひて來た。

數へ唄

一つかへ 柄杓に笈杖に笠

巡禮姿で父母を尋ねうかいな
 二つかへ ふだらく岸打つ御熊野や
 那智山お山は音高い響かうかいな
 三つかへ 見るよりお弓は立上り
 小盆にしらげの志進じようかいな
 四つかへ ようこそ巡禮廻らんす
 定めし連衆は親御たち同行かいな
 五つかへ いやいやわたしは一人旅
 とゝさんかゝさん顔知らず會ひたいわいな
 六つかへ 無理にさしだすわらぢ錢
 少々ばかりの志進ぜうかいな
 七つかへ 泣く泣く別れる我が娘
 のび上りすり上り後から見送ろかいな
 八つかへ 山越え海越え谷を越え
 かんなんして來た我が娘いなさりよかいな
 九つかへ 九つになる子の手を引いて
 十郎兵衛やかたの表口つれこもかいな

十かへ 徳島城下の十郎兵衛は

我が子と知らずに巡禮を殺さうかいな

十一かへ 一々佛壇華をあげ

抹香の煙で巡禮を送らうかいな

二、お 手 玉 (おじやみ又は石など)

布片を合せ縫つた小さい袋の中に砂又はじゆす玉の種子、麥等を入れて作つたものを五箇乃至七箇をもつて一組とし之をもつて遊ぶ女兒特有のもので、その種類は非常に多いが今二種をあげて置く

(一) 綾 を り

三つの綾をりには次の様な唄に合せてする。

「ひんにや、ふにや、みやの山から水吹く鐵砲、八方播摩の林、お池の千鳥、淺草の花は、咲く
 か咲かんか今咲き候、金らんどんすに、秩父の枕、同じめくらが杖ついて通る、そこちよつと通
 せ、通すことならんで、一もんめ、二もんめ」

二つの綾をりの節は、

「隣に餅つく杵の音、杵借しても餅くれん、うちもつかんかなあとつさん、小豆がたけたら搗い

てやろ、ひい、ふう」

これ等の唄をうたひながらつまらず何回もくりかへし行ける程よいわけである (板野郡撫養町)

(二) おじやみ

座してなす場合が多いもので、今五箇の場合の一例を示してみる。

「お一つ お一つ お一つ お一つ お一つおとしておさらひ」

親玉を上方にはふりあげ一つづゝ下のをとり、上にあがつたものをとつておとしてゆく

「お二つ お二つ お二つおとしておさらひ」

親玉を上にはふりあげ床面のお手玉を二つとり親玉をうけ又二つ下におとし親玉を上にはふりあげ下のを二つづゝとり終ると親玉を上にはふりあげおさらひで全部とる。

「お三つ お三つおとしておさらひ」

「とりつけ とりつけ とりつけ おとしておさらひ」

親玉を上にはふりあげその間に下のを一つとつて左手につけておとしてゆく

「おはさみ おはさみ おはさみおとしておさらひ」

左手をひろげとつたお手玉を親玉をはふりあげた間に左手の指と指の間へ全部はさんで行く

「おてつけ おてつけ おてつけ おてつけおとしておさらひ」

左手の掌へ一つづゝあて、落して行く全部できたら「おさらひ」で一つのお手玉を上にはあげ下に散在

する凡てのお手玉をすばやくとり上から落ちて来たものをうける。次に親玉を上にはあげ全部を床面に落し左手を床面に親指と人さし指で橋げた形に空間を作り右方に落ちてゐるお手玉を一つづゝ親玉を上にはあげた間に、

「こまい橋渡らう、こまい橋渡らう」

といひながら順次くゞらせてしまつたら又親玉を上にはあげて下のもの全部を「おさらひ」でとる。これができたら掌面を床につき腕と脇の空間をもつて大きな橋とし

「大きい橋渡らう、大きい橋渡らう」と順次小さい橋を渡らうといつてしたと同じにして全部通らせてしまへばよいのである。(名東郡佐那河内邊)

この方法は地方によつて色々な遊び方があるが、一例にとりめておく。尙海郡郡牟岐町邊では、三つ又は四つで綾をりしながら次の唄を歌ふ。

ひいふうみよの景色をはるかに眺めて

梅に鶯ホーホケキヨとさへづる

梅と櫻は匂はんぐわん

明日は北野の二軒茶屋で

琴や三味線琵琶や胡弓ではやし

てんく手まり歌早五十はふつた

三、羽根つき

お正月の女児の遊びは何といつても羽根つき遊びである。きれいな羽子板をもつて長袖にお太鼓帯をしめて、赤いリボンをつけた女の子の羽根つきに日本のお正月は訪れて来たものであつた。だから羽根つき唄は非常に多い。次にその二三を掲げる事にする。

◎一本目には

- 一本めには、池の松
 - 二本めには、庭の松
 - 三本めには、下り松
 - 四本めには、しだれ松
 - 五本めには、五葉の松
 - 六つ昔の高砂や
 - 尾上のお松そでの松
 - ちよつと七本目には姫子松
 - 八本めには、濱の松
- この松は有情の松で

情ありまの伊勢の松

あげた下げたみなさん一たいかしました。

お拂ひなさい。

(徳島市内)

◎ひとめふため

ひとめ、ふため、みやこし、よめご
いつやのむかし、ななやのやこし
ここので、とう

(徳島市内)

ひとめ、ふため、みやこし、よめご、いつやのむかし、ななやのやこし、ここのつとう

(美馬郡郡里邊)

ひとめ、ふため、みやこし、よめご、いつやのむかし、ななやのむかし おんばの片目

(三好郡晝間邊)

四、紙面(めんこ)遊び

薄手のボール紙を直径七種位の圓形に取り、表面に軍人とか軍艦とか子供等の數びさうな印刷繪を
はり、裏面に數字等を印刷した紙をはつたもので、この遊びには色々あるが、よくやる二種の遊びを

記しておく。

一、めんかへし

二人以上の兒童がなす遊びで、地面にめんをおき、一人がその近くへ強く投げつけた時、あふりで裏がへつたら勝ちでとることができ、負けた者は新しいめんを又地面におく、勝つた者は他人のめんが裏返らなくなるまでつゞけてすることができるのである。

二、ぬき

めん二三十枚を重ね積み、豫め定めた親めんを下部に入れ二・三人が交互に横よりめんをなげつけて親めんを抜き出し得たなれば、勝となるもので、勝つた者は積重ねためんを凡てを取ることができるのである。

めんには尙直径二纏位の小めんがある。之は縁に蠟を塗つてある。子供達は地上に一線を引きその線の處から右手の人さし指と親指の間に小めんをはさみ強く押し飛ばして、その飛んだ距離の多少によつて勝敗をきめ、勝てば相手のめんをとる事ができるのである。(板野郡川内邊)

五、縄飛び

一年中を通じてなす少年少女の遊びに縄飛びがある。阿波の子供等がなす縄飛びの遊び方には色々あるが代表的な二種の遊び方を記しておく。

その一つは一人が両手で約一尋位の縄の両端をもつて自分の身體の上下を旋回させ、地面に來たとき飛越えるのであるが、その二は二人の子供が約二尋位の縄の両端をもつて上下に旋回させ、並居る子供達が順次縄が地面に下りて來た時飛び越えて行く方法がある。次に古くある阿波の子供の縄飛びを記して置く

インニクニクニク

サンシヨニシヒタケ

ゴボウニムクダケ

ナナクサニヤマイモ

いつとこ、にとこ、はげいとこ

はげてもかんまんのういとこ

大波、小波

風が吹いたら廻せ

一二の三と來し

ごめん、どなた

わたし〇〇〇(自分の名)

はいよろしい
 アツブク、チツチク
 出てよろしい
 おはいり
 じゃんけんぽい
 出てよろしい
 大波小波
 ドンブリかへして
 アツバツバ

(板野郡板東邊)

六、「ばい」遊び

鑄物をもつて作つたばいをくで紐で巻いて、箱の上に菓蓋又は蒲團を舟型に敷いた中へ一ばい相手と一緒に投げ込むと勢よく廻り他人のばいをはじき出すことができれば勝となるもので、子供等は多く持つ程強者とするのである。この遊びは冬の正月を中心にはやる遊びでめん遊びと共に學校教育上不良なりと排斥されて來た遊びであるが、子供等は非常にこの遊びに熱中して未だに農村で盛に行はれてゐる遊びである。(阿波郡土成邊)

七、輪 廻 し

男兒の元氣な遊びである桶の竹たが又は銅・鐵等で作つた直径六十纏位の輪を竹の枝つきのものや木や金を丁字形又はY字形に作つた六十纏位の柄をもつて押しながら走ると、思ふ方向に走る。子供等はそれを押しつゝついて走り遊ぶので、冬向によい遊びであつた。後には自轉車のリムを用ひて、その凹面を一本の棒で押し走つた事もあつた。今はあまり見られないが元氣のあるよい遊びであると思ふ。(名東郡上八万)

八、つきてつぼう

青い女竹を長さ二十纏位に切り中空にして之を鞘にし、別に細い竹の本の方に鞘と同じ太さの柄をつけ、鞘の中を自由にぬきさしできるやうにしたものを作る。之にりゆうのひげの玉或は和紙を噛み丸めたものを弾丸としてきつく押しこむと空氣の壓力でボンと音を發する。子供等はめい／＼これをもつて日本軍と支那軍等と別れて兵隊ごつこをするのである。(名西郡下分上山)

九、風 あ げ

阿波は世界一を誇る撫養の「ワンワン」や「菊」等の影響をうけて風あげは非常に盛である。然

しその季節は關東がお正月の景物であるに反して初夏及初秋の景物になつてゐる。阿波の子供等のあ
げる風は奴風と角風（のぼりといふ）の二種である。

奴風は幼童のもので、大きい子供は大抵は角風を揚げて楽しむのである。角風は宇風が多い。大人
の真似をして、宇多紙二枚張、四枚張の大きなのを手製するものもある。遊び方は單に高さをくらべ
るばかりでなく、両者の糸を搦めあはせて「かけあひ」をし他人の風をすりきつて飛ばせることもあ
る。時に次の様な唄をうたつてゐる子供がある。

風々あがれ、天まであがれ
落つたらお池へ落ちるぞ

風々あがれ、天までのぼれ
大きなお空へまひあがれ
あがれば草履かつてやる

天狗さん、風つか（下さい）
あまつたらもどす

（板野郡板東邊）

十、竹馬

雪の降り積む頃の男の子の遊び道具に竹馬がある。長さ百五十纏位の二本の竹竿に下方より二十纏
位の所に稍太い竹の二十纏位のを二つ割にしたものか、幅五纏位の板二枚を挟み固く繩にて結び
つけたものを一對こしらへ、その上に足を置き、竹の上方を兩手にもつて歩くのであるが、子供等は
上達する程足場を高くして誇りとし、又かけくらべをして楽しむ。うんと上達すると一本は肩にし一
本足で歩くものさへある。竹馬に乗つた二人が落としあひなどをして遊ぶこともある。

（勝浦郡多家良邊）

十一、將棋遊び

大人の將棋は子供等は本將棋といふが、阿波の子供等のなす將棋は普通次の三通り位である。

一、袂將棋

一方は大駒九個を他方は歩駒九個を盤の一番手前の割内に一列に並べ、各交互に駒を前又は横に動
かし我が駒と駒の間に敵の駒を挟んで取るのである。

二、廻り將棋

この遊びは二人でも三人でもできる遊びで、各自持駒一箇を定め盤の一端に立て置き、別に金駒四
枚を盤の中にて振りまき、その一つがたてに立つたときは十とし、横になつて立つた時は五とし、他
の場合は一としその合計数だけ盤の目を進め出發點に早く歸り着いたものを勝とする。ふつた場合四
枚の駒が全部裏がへつた時は零で盤から駒がまけ落ちた時も零で進行できない。

三、彈き將棋

挾將棋のやうに兩人大駒歩駒を互に盤に並べ交互に敵の駒を目ざしてはじき落すのであるが、敵の駒を落せば我がものになるが、自分のも共に落ちると、自分の駒はとられるのである。

(勝浦郡勝占邊)

十二、石あて

地面に長さ二米位幅一米位の矩形を描いておいて數人づゝ同數に二組に分れ先づ甲組の者はめいめい矩形内任意の場所に小石(扁平な石を好む)散在させておくと、乙の組の者はめいめい平たい小石を肩の上とか頭の上に乗せて矩形の線の所まで行つて、組の置いてあるこれと思ふ石をめがけて、肩上又は頭上の石をそのまゝあて、これをかはりつこに當てあつて、當て得た石數によつて勝負をきめる遊びである。(海部郡淺川邊)

尙又二人でなす場合に、先づ甲が手持の石(特徴をもつ石)を相手の當てにくい様な所例へば溝の岸とか凹地とかに投げ置く乙の者が所定の處からその石へあてると勝ちになる。若し當てることのできなれば、甲が乙の石へ當てて遊ぶ、勝てば「一たい」かしたことになる、點數の合計による多少によつて、勝負を定めて喜ぶのである。(海部郡輦奥邊)

十三、ラムネの玉あて

ラムネの壘の中にある玉をもつて、斜に立てかけた石又は板の上をころがし、最も遠くころがれた者からその近くにある玉へ打ちあて、うまく當ればその玉を占有して遊び、多くとつたものが勝となるのである。(徳島市内)

十四、ハンカチとり

五六人の子供が並列する下の者より順次ハンカチを右手で母指と人さし指の間に入れさせ、うまくとり得たら次の上座の者に持たせ、とることができれば又上座の者にもたせ、とつて行くのであるが、とりそこなつたらその者と入れかはり、これをくりかへし最左翼の王様の地位に達することを競争するのである。(徳島市内)

十五、おやまさん

女兒の室内遊びにおやまさん遊びがある。平素母親から色々の小布を貰ひ箱にしまつて置いたのを出し「おやまさん」(女郎人形)に襦袢・着物・帯等に工夫して着付着替をして遊ぶのであるが、「お

やまさん」は紙を筆の軸に巻きそれを寄せて鎌を拵へ髪型にし、黒色に塗り、顔は白紙又は白布の中に綿を入れ、おとうさん、おかあさん、赤ちゃんなどの人形を作るのであるが、人形は首だけ木軸に粘土をつけて作った既製のものを買つてなす場合もある。又玉蜀黍の白い皮と茶色の髯を用ひて作ることもある。(徳島市内及麻植郡山瀬邊)

十六、めんあて

紙面を各自一枚づゝだす、一人の者がそれを掌中に一緒にして板塀又は葎等に投げつける。すると地面に落ちたものを見ると紙面(めんこ)表面が上になつてゐるものと裏面が上向いてゐるのがある。この場合表が出てゐれば「生き」と云つて裏が出てゐると「死に」といつて、「死に」の紙面の分は凡て貰ふことが出来ることになつてゐる。投げる順序は「じやんけん」で豫め定めて置くのである。(海部郡鞆奥邊)

十七、竹とんぼ飛ばし

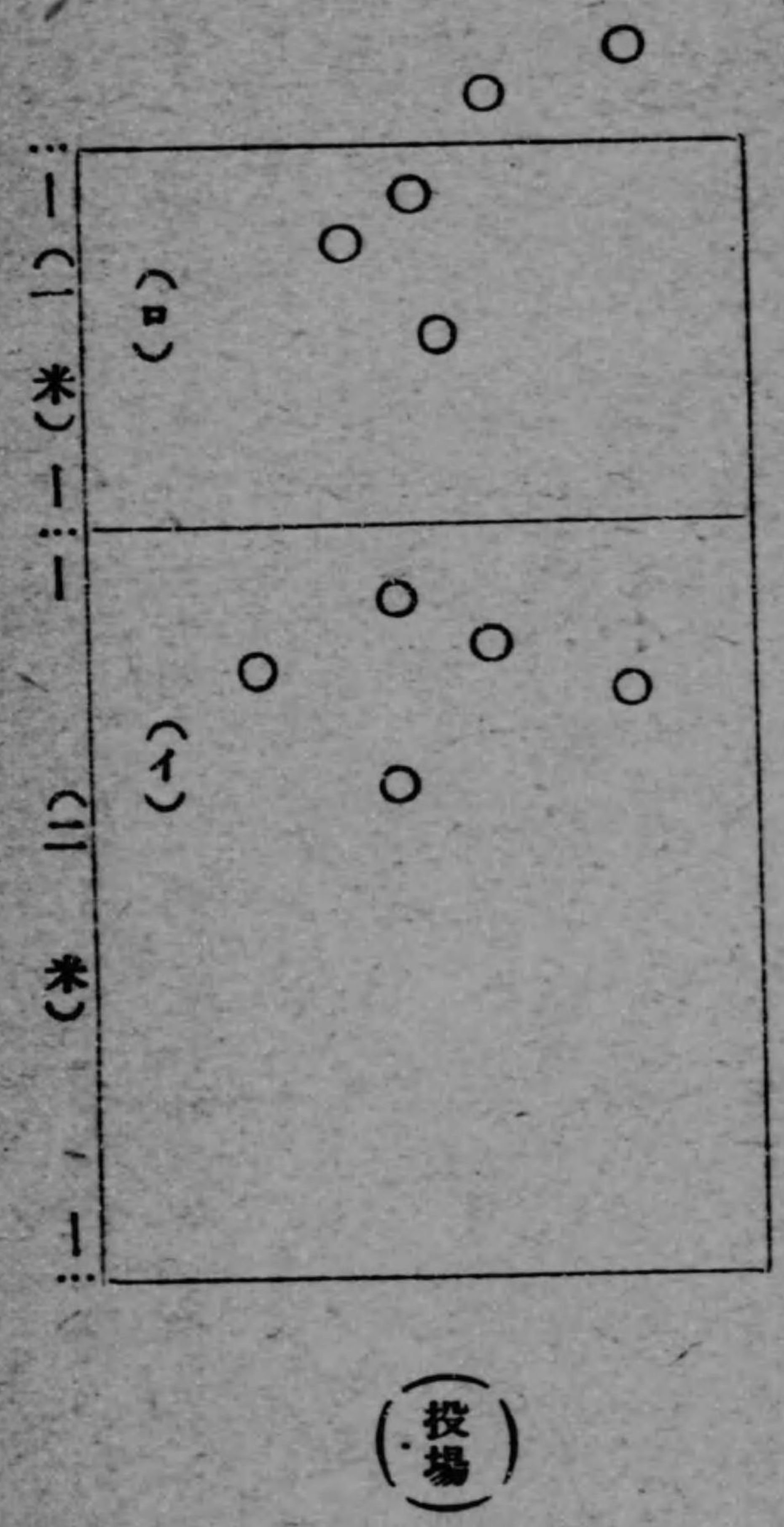
竹を二十糎米位の長さに切り薄く削いで、中央に細い軸を固定して竹とんぼを作り、數人の子供等が寄合つて遠く飛ばせた者が勝となる。又滞空時間の長短によつても勝負をするのである。

十八、釘打ち

五寸釘をめいゝ持つて庭に出る。各自釘の頭部を持つて、先づ相手が地面に打ちつけた釘を目あてに、相手の釘を倒して、その傍に自分の釘がうまく立つやう力一ぱい打ち込むのである。順序は交替にするのであるが、勝てば相手の釘を取ることができ、又つゞけてすることができるのである。

十九、硝子めんあて

地面に次の線を引く。



人数は何人でもよいのであるが、子供等はめい／＼一個づつ、「ガラスめん」(直径一纏位の圓形硝子)を持ち、(イ)(ロ)の間に引かれた線になるべく近づくやうに投げる。皆が投げ終ると、その結果を見て豫定の線に一番近く投げられたものを一番、次の者を二番といふやうに投げる順序を定めるのである。

一番に當つたものは先づ皆の硝子めんを一つづつ預り、投場より一度に(ロ)面に向つて投げるのであるが、この場合(ロ)の區劃内より他の面に落下した硝子めんは、その傍に直立し自己の持つ硝子面に落し當てる。その場合うまく當てる事ができれば、その硝子面は自分の所有にすることができるのであるが、當らない時は、二番の者が替つて投場からまゝとめて投げ、勝負を繰返すのである。尙(ロ)面に投入れた硝子面は(ロ)面區劃外より適當な姿勢で當て、よい事になつてゐるし、當れば次々と當て得ることができ、それは自分の所有となるのである。(那賀郡羽浦邊)

第五章 草木結合の童戯と童謡

一、椋の實拾ひ

木枯の風が吹いて、椋の實の熟した頃、椋の實拾ひに行くのである。大きい子供等は樹に登つて、

ちぎり喰ふのであるが、登ることのできない小さい子供等は下でゐて、落ちてゐるのを拾ふのであるが、鳥でも飛んで来ると、

椋鳥椋落せ

椋がなければ木落せ

木がなければさね落せ

さねがなければ皮落せ

と大きな聲で歌ふのである。急に風でも吹いて来てばらくと椋の黒い實が落下するとばひあつて拾ふのである。(阿波郡土成邊)

二、松葉相撲

地面に落葉した松葉を拾ひ、中央の股に引かけ合つてきられた方がまけになる遊びである。

三、董の花相撲

董の咲く頃、春の野に出た子供等は、董の花をとつて花の柄と花のつきねの曲つた所をかけ合せ、ちぎれた方をまけにするのである。董のことを阿波では一名すまふとり草とも云ふ。(徳島市内)

四、つくつく坊さん

春風につくしが出そめると、子供等はそれをみつめて「つくつく坊さん」といつてなつかしむ。そしてそのつくしを摘みながら次の様な唄を口ずさむのである。

つくつく坊さん

つくつく坊さん何故泣くの

親がないか、子がないか

たつた一人の娘の子

魔匠にとられて今日七日

七日と思へば四十九日

四十九日の墓参り

袴がなうて借りに行く

あつてもないと云ふて貸してくれん

一本折つては腰にさし

二本折つては肩にさし

三本ぶりに日が暮れて

おとろし(おそろし)おとろしいつきよつて(行きつゝあつて)

二軒紺屋が建つとつて

兄の家は青畳

弟の家はあら筵

兄の家に泊つて

朝起きて見れば康申さんの裏で

小豆餅つきよつて(搗いてゐて)

一つ食やあんまんま

二つくやあんまんま

三つぶりに柄が抜けた

(勝浦郡生比奈邊)

つくつく坊さん

つくつくぼうしつくぼうし

親がないか子がないか

たつた一人の姉さんが

魔匠にとられて今日七日

七日と思へば四十九日

四十九日の墓参り

袴がないと言ふて借りに行きや
あつてもないと言ふて貸してくれぬ
腹立ちや腹立ちや
天神川へ身を投ぎよか
むらさき川へ身を投ぎよか
天神川へ身を投げて
むらさき川へ浮いて来て
上にをる小坊さん
一寸引上げておくれんか
引上げたおちに何くれる
赤いもん三つ青いもん三つ
合して六つ、六つにある子
花とりにおいで
何花とりに
櫻花とりに
一本折つてはお手に持ち
二本折つては腰にさし

三本ぶりに日が暮れて
兄の庄屋で泊らうか
弟の庄屋でとまらうか
兄の庄屋にや猿が居る
弟の庄屋にや犬が居る
兄の庄屋で泊つて
朝起きて見たら
猿が餅搗きよつて
搗き手がなけりやついたんぎよ(搗いてあげよう)
もみてがなけりやもんだんぎよ
たべてがなけりやたべたんぎよ
一つ食やうまんま
二つ食やうまんま

(板野郡松島邊)

五、火

蓋や鍋で物を煮てすぐ蓋からはづすとその尻の煤にまだ火の粉が點滅するものである。子供等はそ

れを見て驚異と羨望を持つのであるが、豊かな彼等の想像力は次の様な寓論に移行されうたひたのしむのである。

南の山に火が見える

お月か星か螢か

おちよちん(提灯)とぼしていて見たら

大けなお家の婚嫁じやく

(板野郡住吉邊)


六、珠數玉つなぎ

じゆす玉(阿波では「すゝたま」)の實が熟すると大理石色の堅い種子ができる。女の子等は土手や畦等へ行つてこの粒子をとつて歸り、米を針に通し順々にこの種子を針に通して行くと珠數の形になる之を頸飾りにしたり、「けんけんばあ」の遊びの時に、投げ石のかはりに投げ入れて遊ぶ具にし又、お手玉の袋の中に入れ等して遊ぶのである。

七、花つなぎ

椿の花が地面に落ちるとそれを紐に通し、首飾りにして遊ぶ。

クローバーの花を葉柄から摘みそれを順々に長くつないで輪にして遊ぶ。

たんぼの花を取つて長い花軸の端を二つにさき、「たんぼくくだまけく」といひながら口に入ると、圖のやうに次第に外側へ渦巻に兩方へ別れて巻くのであるが、それを取り出して、巻いた程度の多少をもつて勝負をする。(徳島市内)

八、山吹のしんぬき

山吹の枝を折ると莖の中心が白く見える。箸を細く削つてそのしんをつくつと「ぼす」と音がして、美しい眞白な燈心の様なものが出る。又莖を短く折つて口でしんを吸ひ出すと「ぼんく」と音が出るのを見て喜ぶのである。

九、つばな撒き

土手でつばなを抜きあつめ、一握もたまると、それを地面に撒くと、つばなは散亂して多くの空間ができる。次の番の者が又上から撒いて、前に撒いて散亂してゐるつばなに觸れずに散亂したものは自分の所有になるのである。(徳島市内)

十、ほほづき遊び

酸漿の實をとつて中の種子を針でとり出し、皮袋にして口に入れ、特有な音を立て、遊ぶ遊びは、海ほほづきの使用と共に廣く行はれてゐるが、阿波の農村の子供等の遊びには次の様なほほづき遊びがある。

車前草やきぼふしの葉をもんで口で吸ひふくらませて遊ぶことや、そら豆の葉を口で吸ひ袋にして小さい孔をあけて、ほほづきがはりにして遊ぶこともある。

葱のしぶ皮をふくらしたり、葱の花が咲いて種を取つた後のや、堅く赤くなつた部分の両端を糸でく、つて小さい孔をあけほほづきがはりに鳴らして遊ぶ。(麻植郡山瀬邊)

十一、麥笛と若葉笛

初夏の阿波の田舎の子供等の遊び道具は、麥笛と若葉笛であつた。青い麥畑も愈々麥秋に程近くなると、緑の麥穂に入り交つて黒穂が見える。學校の往復途中の子供等はそれを抜きとり長さ二十糎位の管にし一端を一寸嚙んで吹くと麥笛ができる子供はめい／＼その麥笛を吹き鳴らしながら足並揃へて歸つて行く様は初夏の長閑な田園の風景であつた。

同じ頃常盤木はやはらかなうす緑の葉を出すものである。林や生垣の中のその葉を取つて、口にあ

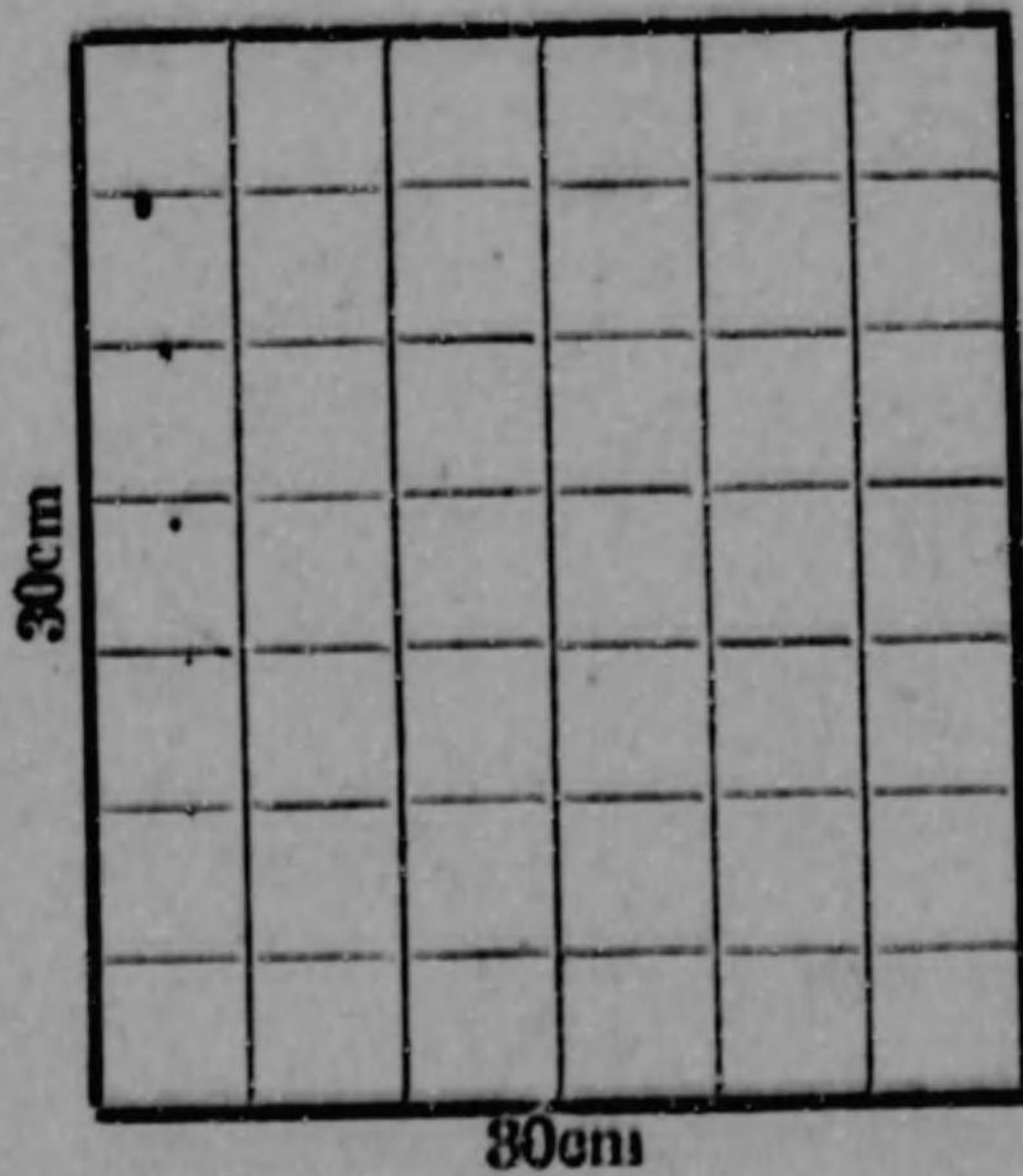
て軽く吹くと特有の音が出る。

「ピーピク、ピーピク、イ、ピーピー」

こんな音にも聞える。これが若葉笛である。(勝浦郡小松島邊)

十二、まきの葉かくし

地面に下圖の様な圖面を描く、三人でも五人でも子供が寄つて來る、とじやんけんで探す者をきめる。他の者は横の葉を長さ一糎位に切り井盤目の線の所等探しにくい所を掘つて軽く土を蔽ひ埋め、終ると「よつしや」と云へば鬼は、あちらこちらと掘つて横の葉を探すのである。そして一番にみつけれられた者が次の鬼になるのであるが、十回も掘つても尙横の葉を探し當てることのできなれば、その者は今一度鬼になることになつて、新しい勝負が開始されるのである。(那賀郡羽浦邊)



第六章 動物結合の童戯と童謡

一、螢 取 り

阿波は麥秋の頃から水邊を慕つて螢がとびかふ。子供等は箒をもつてその螢をたゞき落し、螢籠に入れて楽しむのであるが、子供等の唄には次の様なものがある。

ホ、ホ螢來い。

あつちの水はにがいぞ

こつちの水は甘いぞ

ホ、ホ、螢來い。

ホ、ホ螢來い。田の虫來い。

あんだの蔭から養着て笠來て飛んで來い。

所によつて多少唄が異つてゐる。

(勝浦郡兒安・那賀郡今津)

ホ、ホ、螢來い。

あんだの蔭からしので來い。

あつちの水は苦いぞ、

こつちの水は甘いぞ

ホ、ホ、螢來い。

(美馬郡郡里)

三好郡佐馬地方面の螢取唄は、

ホ、ホ、螢來い。

ホ、ホ、螢來い。

あつちの水は苦いぞ、

こつちの水は甘いぞ、

ホ、ホ、ほうたるこい。

ホ、ホ、ほうたるこい。

おしりの光でとんで來い。

ホ、ホ、ほうたるこい。

ホ、ホ、ほうたるこい。

二、とんぼとり

夏も終り頃から初秋にかけて色々の蜻蛉が野も山も街の空地も一面に飛んで來る。子供等は終日とんぼを追ふて楽しむ。子供等は細い竹の尖にもちをつけ或は白糸に唾とんぼを囮につけて、

「とうく、とんぼこう」

とくりかへし竹竿をふりまはしてとらへるのは徳島市近郊の實況で、

「おんべけえ、おんべけえ」

とさけぶのは板野郡松茂邊の情景である。

とんぼ、とんぼ、おとまりなされ

稲がうれたら餅ついて食はす

と唄ふのは那賀郡見能林邊の子供等のとんぼつりである。

三、かうもりとり

最近は見ることが少くなつたが、今から二三十年前は夏の夕方になると空一面にかうもりが飛んで来たものであつた。宵月夜にはつきりと見えるこの怪物を子供等は長い竹竿でもつて振りまはした。ビュービューとうなりを立てる程にふりまはすと、時たまその竿に叩かれて地面に落ちて来る事もあつた。

かうもり来い 草履やろ

草履がなけりや買うてやろ

(徳島市及近郊)

こんな唄を何度も繰返しながら竿を振る、子供等の情景は誠に夏の夕方にふさはしいものであつた。(徳島市内)

四、蟹 つり

蟹が街路の石垣等からはひ出す頃、幼い子供等は糸に澤庵を結びつけ、蟹がはさみ食はうとするのを引きあげてよろこぶものである。(徳島市)

五、蛙 つり

夏になつて、ひき蛙、殿様蛙等が池邊や水田を横行する時になると、子供等は「大ねすみがや」の穂の長い柄をとつて蛙の首がはいる程度のわさをつくり、蛙が眼をばちくりさせてかまへてゐる鼻先近く持つていつて動く機会を待つて、跳び出すと同時にわさを急に引くと丁度首が結べるやうになつてゐるから蛙が釣れるわけである。(那賀郡立江邊)

六、魚 とり

夏から秋にかけて阿波の田舎の子達の楽しい遊びは魚とりである。今そのとり方を左に記す。

一、たますくひ たま(手網)の大きさには色々あるが普通直径二十糎位のものゝ十糎位のものが多い。く用ひられる。小さい方は「えびだま」ともいつて主として海老をふせて捕るのに用ひてゐる。

大きい方は川の雑魚をふせてとつたり川の流れの魚の通りさうな所に横にして上から追竹で雑魚を追ひこんで取る。

二、土箕すくひ　竹で編んだ土箕を持つて溝や池の中の雑魚のをりさうな所へ還入り、両手で下部に斜に据えこんで右足で岸の草や藻等をふまへるとかくれてゐる魚類が飛び出して、土箕に入ると直ちに上げてとるのである。

第七章 天象結合の童戯と童話

一、月を見て

天象は子供の驚異であり、あこがれの的である。母の胸に、子守の背に幼児は月を見てあこがれる時、守をする人の口から出る唄がこれである。

お月様えらいな、お日様の兄弟で

三日月になつたり、まん丸になつたり

(勝浦郡生比奈)

お月さんなんぼ、十三　七つ

やれ年若や

わかやの門で　油一升すてた

その油どうした。犬がねぶつて候

その犬どうした。太鼓にはつて候

その太鼓どうした。

ゆふべの芝居ではりさけたく

(勝浦郡生比奈)

お月さんなんぼ　十三　七つ

まだ年若いな、若い時に子生んで

だれにもらす　おまんにもらす

おまんどこへいた。

油買ひに酢買ひに

油屋のもんで　すつとんとんとすべつて

油みな流した。

その油どないした　犬がみなねぶつた。

その犬どこいた。太鼓にはつてトントントン

(板野郡住吉)

お月さんなんぼ、十三　七つ

まだ年若い、赤子をうんで
誰にもらす、おまんにもらす
おまんどこへいた。

油買ひに酢買ひに

油屋のかどで すつてんころりとはねこけて

油みなすてた。その油どうした

犬がねぶつてしまふた。

その犬どうした、太鼓にはつてしまふた。

その太鼓どうした

去年の祭に たゞきやぶつてしまふたしまふた。

(名西郡上分上山)

二、雪遊び

南國阿波では雪の降る日も少く又山村を除いては、大して積ることもないので阿波特有な雪遊びはない。たゞ雪だるまを作るとか雪合戦をすることも少い。むしろ雪の降るのを珍しがつて喜ぶ次の童謡がある。

雪やコンコン

霰やさつさ

室灰だらけ

雪の降るなかを子供達は大聲で唄ひながらとび廻るのである。

三、風の日

子供は風の子である。野を渡り山を越えて吹いて来る風に對して、聲を揃へて次の唄を歌ふのである。

お多福三福

風が吹いたら四福

(名東郡上八万邊)

四、雨降り

雨の降る日は子供等にとつてはまことにつまらない日である。阿波の子供等は家の窓から降りしきる雨脚を眺めて次の様な童謡を口ずさむのである。

雨がしよぼく降る晩に

豆狸まめだがとつくり持つて酒買ひに

917
220

製本控

917	220	號	年	月	日
阿波民族叢誌 第一輯					
備考					

917
220

